

# 室生犀星の王朝小説における謡曲の受容—「遠江」を中心に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-04 キーワード: 作成者: 孫, 媛媛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00063656">https://doi.org/10.24517/00063656</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 室生犀星の王朝小説における謡曲の受容

——「遠江」を中心に——

孫 媛 媛

## 1 犀星と謡曲

まず、先行研究において、犀星の王朝小説と謡曲との関係はどのように扱われているか確認する。久保忠夫は小説「遠江」を収録している『王朝』（実業之日本社、一九四一年九月）について、『大和物語』だけに注目している。磯貝英夫は犀星の王朝小説の創作方法を論じる時、『大和物語』だけではなく、『伊勢物語』からの取材についても述べている。志村有弘も犀星の王朝小説を定義する際に、『大和物語』と『伊勢物語』の両方からの取材を強調している。このように、犀星が王朝小説を作るために取材した古典については、『伊勢物語』と『大和物語』が主に指摘されていたのに対して、謡曲はあまり触れられていなかった。一九九〇年代に、上坂信男は一度謡曲に取材した犀星の王朝小説を論じたが、それにもかかわらず、その後も謡曲は取り上げられなかった。そのため、そうした傾向は現在に至ってもまだ続いていくように見える。例えば、西田谷洋は『伊勢物語』『大和物語』等の古典文学に着想を得て創作した一連のテクストを

第二次世界大戦期間に、日本では、「古典の価値が再認識され、国粹的な伝統が重んじられてきた」<sup>1)</sup>。昭和天皇も「日本古文化研究所に対し、事業御補助の思召しを以て金三千円を下賜」<sup>2)</sup>した。このように、「日本の古典に対する関心」が「かつてないほどたかまつていた」<sup>3)</sup>時期に、室生犀星は「婦人之友」の編輯者である松井志づ子から、「王朝物語」に取材した短篇を続けて三ヶ月くらゐ書いてほしい」という依頼を受けた。そして、犀星は『伊勢物語』、『大和物語』や謡曲などを通して王朝の文学を学びながら、「荻吹く歌」(『婦人之友』・一九四〇年一月)を皮切りに、王朝小説を創作し始めた。しかし、先行研究では、『伊勢物語』、『大和物語』からの取材が主に指摘されてきて、謡曲はあまり注目されていない。謡曲から取材した事実は忘れられているかのように見える。本論文は現在の研究状況を踏まえ、王朝小説「遠江」(『婦人之友』・一九四一年一月)を謡曲と対照させて両者の関係を考察しながら、犀星の王朝小説における謡曲の意義を探求する。

犀星の王朝小説と呼んでいる。また、乾英治郎は謡曲からの取材を示したが、どのように取材したか論じていない。<sup>10)</sup>  
王朝小説を書き始めた一九四〇年に、犀星は能を見て次の感想を述べている。

或る批評家が「隅田川」を見て涙が出たと書いてあだが、私はそれほどまでに「隅田川」が人の感情に深くはいり込んだことで、私自身は不思議な感じがした。涙をながすやうな気がしなかつた。私は、「隅田川」が分らなかつたのであらうかとさへ思った。私の「隅田川」の感銘は静かな宿縁のなげきを、心のすみずみまで行き亘らしてくれたことで、あふれるやうな静かさの量積をかんじたのである。以前、子供を亡くした当時にこの「隅田川」を見たら、私は或る批評家のごとく流涙の一夜を送つたことであらう。

ともあれ「隅田川」を見たときは芸といふものの分れ目、文学と能の分れ目、その継ぎ目を考へざるをえなかつた。芸の分れ目を感じることは美しさの底に達するやうな思ひがする。人情を気高く表はして行くことは却々できるものではない、能はその気高さにあこがれてゐるものであらう。<sup>11)</sup>

このように、能「隅田川」に対して、「或る批評家」が泣いたとは異なり、犀星は能の静かさや、美しさ、気高さなどに着目している。また、この文章のタイトル「気高いもの一つ」から、能「隅田川」は犀星にとって気高いものと伺える。それらの点から考えて、

この観能によって、犀星は能と文学の関係に目を向けるようになったのであらう。なお、能を観賞するには、能の詞章である謡曲を予め読まないと、能の内容を理解するのは非常に難しい。したがって、能「隅田川」を見る前に犀星は謡曲「隅田川」に触れたと考えられる。更に、犀星は王朝小説を創作する雑誌の依頼によって、謡曲を読んで勉強するようになった。小谷恒が

「婦人之友」から依頼されたことが機縁となつて、犀星は昭和十五、六年頃から所謂王朝物の中に踏み込んで行くが、やがてそれに没頭し、王朝の文学を下読みをし勉強を専らにした。「伊勢・大和」などの歌物語、「堤中納言」「謡曲」などを私に持参させ、新鮮な感性で独自の印象を作り上げ、自分の文学に昇華させて行った。<sup>12)</sup>

というように、王朝小説を創作するために、犀星は古典の本を読んで勉強した。本は犀星の弟子格の小谷から提供された「伊勢・大和」などの歌物語、「堤中納言」「謡曲」などである。また、同様の記述は次の文にも見える。

既に始まっていた中国との戦争の無言の重圧は加わるばかりであった。文士の多くは何かを求めて自分を変えたいという願望を持つたに違いない。変えなければどうして文学の中で生きて行けようかという切実な思いであった。「婦人之友」の依頼があったのを機会に犀星は「王朝の文学を少し読んでみたいから、本を二、三

冊適当に選んで持参してほしい」と言つて来た。私は自分の馴染の深い歌物語を読んで貰おうと有朋堂文庫の「平安朝物語集」や岩波文庫の「参考伊勢物語」などを届け、更に何かの手助けにと謡曲集を添えたりした。

ここで、王朝の文学を勉強するため、小谷は犀星に「有朋堂文庫の『平安朝物語集』や岩波文庫の『参考伊勢物語』、『謡曲集』などの古典を提供した。こうした状況で犀星は謡曲を読み、勉強していた。そして、謡曲に取材した王朝小説を作った。そうした創作は犀星自身も明言している。

室生 私のは、今何か別の玉を磨くといふ気持でやつてゐるんです。大分前に支那の童話とか、今昔物語やらをもとにして書いた時がありました。あれは作家の力の衰へた時ですね。ところが、今はそれと違つて、非常に力をもつて元気で書いてゐます。何かきり拓いてゆくといふつもりでやつてゐます。昔と大分ちがつてゐる。——能などをやり出してゐるのは。

ここで、犀星は昔の「作家の力の衰へた時」と異なつて、今は「能など」の古典に基づいて「非常に力をもつて元気で書いて」いると述べている。この語り方から、犀星の「能など」の古典をもとにして書く熱意が伺える。また、犀星が能を創作に取り入れたことも分かる。このような能、謡曲への取材は小谷によつても証言されている。

## 「遠江」

謡曲の「熊野」から題材を得て、熊野の母・熊野・仕い女朝顔の三人の手紙の形式で書かれている。かつて故梅若万三郎の演じる「熊野」を、先生と共に観たことがあるが、漂渺たる名人の演能を、先生は感嘆の息を呑みながら見ていられた。間もなく出来上つたのがこの小説であり、先生の想像力はこのように能を受け取つていたのである。短い中に、そくそくとして平安末期の絵巻物が浮んで来る。王朝物としては初期の作品である。

ここでは、王朝小説「遠江」の作られた由来が記されている。犀星は小谷と共に能「熊野」を見てから小説「遠江」を書いた。この小説「遠江」は「謡曲の『熊野』から題材を得て」作られたものである。犀星は能を見ただけではなく、謡曲も読んでいた。更に、能、謡曲に取材して王朝小説を書いた。また、上坂信男によると、犀星は一九四〇年に成り立った「能楽鑑賞の会」のメンバーであった。したがって、犀星の王朝小説における能、謡曲の役割は無視できない。

## 2 謡曲と王朝小説「遠江」の比較

上坂信男によると、謡曲に取材して書かれた犀星の王朝小説には、「遠江」「景清伝」「粧野」「初雪」「野上の宿」「巴」「松垣の御」がある。また、「松垣の御」以外は上坂が既に、謡曲との比較を通して、王朝小説における犀星の独創と特色を論じている。例えば、上

坂は今回取り上げる「遠江」を次のように論じている。

彼は謡曲「熊野」だけでなく、そのもとである「平家物語」にも触れ、本文の内容を順番にまとめながら考察した。謡曲「熊野」と異なる箇所としては、手紙の形式や、女性の心理、雲州柑、鶴、舞、宗盛の造型などを指摘している。三通の女性の心理を表す手紙で文章を組み立てたり、母を思い出させる美しい雲州柑を設定して「遠江」に戻る日の近づく前兆」を示したり、宗盛の暇を許す予兆である鶴を登場させたり、悩みを表す舞の美しさによつて宗盛に暇を許させる力に注目したり、宗盛を美化して「柔和な宗盛像」を作つたりしている。

このように、王朝小説「遠江」と謡曲の関係は既に論じられている。以下、以上の上坂に指摘されている箇所にも触れるが、異なる角度から分析し、王朝小説における謡曲の意義や犀星の文学などを考える。

まず、小説「遠江」の典拠をもう一度確認する。謡曲「熊野」は小説「遠江」の典拠である。これは「古典に取材した近代文学一覽」や「室生犀星——王朝を求めた自由な作品群」など多くの先行研究で言われている通りだ。また、小谷も書いている。更に、小説「遠江」と謡曲「熊野」の本文を比較すると、両者が一致している箇所も多くある。小説「遠江」が謡曲「熊野」に取材して書かれたものであるというのとは間違いない。

謡曲「熊野」では、重病の老母が娘熊野に会いたくて、手紙を書いてそばに仕えている朝顔に持たせて熊野に会う願望を伝える。手紙を読んだ熊野は主人平宗盛に暇を乞うが、最初許されなかった。

しかも、無理に花見に連れられて行つた。そして、母の病気を心配する熊野は花の散る様子と雨の降る様子を見ると、母の最期に会えない悲しい気持ちが湧いて悩みの和歌を作り出した。宗盛はその和歌に感動して、熊野に暇を許した。熊野は宗盛の気持ちが変わらないうちに、直接に故郷へ帰つた。

それに対して、王朝小説「遠江」では、内容がだいぶ変わつている。宗盛に暇を許させるために、老母は手紙を書いて仕えの朝顔に熊野の家を訪ねさせるだけでなく、一枝の「雲州柑」を持たせてきた。その目的は次のように書かれている。老母は熊野に自分の「切なる御願ひ」をよく理解させ、宗盛に熊野の悩みを見せて暇を許させるために、「雲州柑」を用意した。この一枝の「雲州柑」は熊野に会えるかどうか、あるいは暇を許されるかどうかを「つなく貴いえに」になるものである。そのため、老母は朝顔に手紙とこの一枝の「雲州柑」を一緒に届けさせる。そして、宗盛はこの一枝の「雲州柑」を見て感動して熊野の帰郷を許すように祈つている。

それでは、この一枝の「雲州柑」はどのような意味があるのか。「熊野から遠江の母への手紙」では、以下のように綴られている。「雲州柑」は熊野のところ無事に届けられ、殿中に生けられている。熊野はその一枝の「雲州柑」の橘色を見て「母上の御衣の色」を思い出した。これだけではなく、「雲州柑」の生けられている景色は「故郷のお庭の温かい一処にある蜜柑の木のあるあたり」も想像させる。すなわち、この一枝の生けられている「雲州柑」は熊野に故郷と母のことを考え続けさせるものだ。そのため、熊野は故郷の重病の母を忘れられずに母の最期に会えないのを心配する。また、老母の祈つた

通り、宗盛もこの一枝の「雲州柑」を見た。そして、この一枝の「雲州柑」は宗盛に熊野の故郷と母に対しての関心を持たせるようになった。宗盛はこの一枝の「雲州柑」の鮮やかさから、老母の心を理解できた。自分の最期に熊野に一度会うという老母の願望は確かに宗盛に伝えられた。

この一枝の「雲州柑」は手紙、朝顔と同じように老母の心を熊野と宗盛によく伝えて重要な役割を果たしている。ただし、手紙と朝顔は直接的に、「雲州柑」は間接的に伝える。手紙と朝顔だけの謡曲より、小説「遠江」における「雲州柑」の設定は老母の願望を全面的に宗盛に訴えかけた。宗盛に暇を許させる力は強くなった。

このような設定の努力はこの「雲州柑」だけではなく、鶴の登場からも伺える。一羽の鶴は「低く翼の音」を立てながら「御殿の上をよぎつて」翔けて行った。このような鶴の翔け方を見たのは熊野にとってはじめてである。この「はじめて」の表現からは一般的に鶴が今回のように低く翔けないと考えられる。低い翔け方は何を意味するのだろうか。低く翔ける設定にしたことを通して、鶴と熊野、宗盛との距離を縮めている。このように、その鶴はまるでわざと熊野と宗盛に近づくかのように低く翔けたと書かれている。また、「仕への女達」が「都の空をよぎる」鶴をはじめて見たという描写から、都では、鶴があまり見られないということも分かる。熊野が「子供の折、遠江の野におりる鶴」を「しばしば」見たという内容からは熊野の故郷には鶴がいると分かる。そのため、この都に現れた鶴は熊野の故郷遠江からの鶴と思われるほどの気持ちを熊野に引き起こ

斗堂、子安の塔などがある。もともと、目的はめでたい花見であるが、行く途中に火葬場である鳥部山が見えた。それは不吉な予兆として熊野に重病の母を非常に心配させた。また、旅雁は熊野の帰郷の気持ちを強くさせた。火葬場と旅雁が見えたのは花見の目的から外れているので、偶然なことである。受動的な描写である。ここだけではなく、その後も同じような表現がある。熊野は雨の降る様子と花の散る様子に触発されて宗盛に暇を許させる和歌を詠んだ。この雨の降るのと花の散るのは人間の力で決められないことなので、受動的な表現である。このように受動的な要素を作ることが犀星に前述した鶴を登場させたのではないか。鶴の登場も人間の力で決められないことである。鶴によって、熊野の故郷は思い出される。そして、熊野の帰郷の願望は強くなる。つまり、犀星は謡曲における受動的な要素から影響を受けて鶴を登場させたのである。

さて、宗盛に暇を許させる条件に戻るが、謡曲と異なる箇所は鍵となる最後の条件にもある。謡曲で、宗盛の暇を許す場面は次のように書かれている。

花見の途中、村雨が降って花を散らす。降った雨は花の散るのを見て人の泣いた涙ではないかと思われるほどである。花の散るの命がなくなることを連想させる。熊野は雨の降る様子と花の散る様子に触発されて母の命がなくなることを考えるようになった。そして、重病の母を心配する和歌「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」と詠んだ。熊野の悩みが分かっただけで、彼女を直ちに帰す決心がつかない宗盛はこの和歌を通して子の母を思う情が真実であることをようやく理解でき、暇を許した。この和

させる。更に、「鶴を見てさへ、母上を思ひ出してゐるのであらう」という宗盛の言葉は鶴を見ると、母を常に連想する熊野像を示している。この鶴は熊野に故郷、故郷の鶴や故郷の母を思い出させる。この都に現れて低く翔けた鶴は熊野にとつてまるで母の代わりに訪れてきたかのように描かれている。熊野に母のことを忘れさせないために、鶴の場面は作られたのである。同時に宗盛の心にも母のことを一層留めさせた。宗盛はその重病の母を更に意識するようになったとも言える。これを通して、この鶴の登場は宗盛の暇を許すまでの時間を短縮させた。

以上のように、宗盛に熊野の暇を許させるために、謡曲での手紙と朝顔以外に、犀星は「雲州柑」と鶴を登場させる。両者は熊野の故郷の母を思い出させることで、熊野に重病の母を心配させたり、宗盛に重病の母を意識させたりする。また、「雲州柑」と鶴は皆美しいイメージを持っている。したがって、熊野の母は宗盛に美しく良い母の印象を与えている。これも宗盛に暇を許させるのに役立つ。このように役割で両者は共通している。

それでは、両者を区別するものはないのだろうか。実際に細かく見ると、「雲州柑」と鶴とは宗盛に暇を許させる条件としての性質が異なっていることが分かる。「雲州柑」は老母に用意されたので、宗盛に暇を許させる能動的な条件である。これは手紙と同じ性質の条件であると言える。それに対して、鶴が都に現れたことは偶然なので受動的な条件である。この受動的な性質はどこから出たのか。

謡曲では、花見を見に行く途中の景色は次のように綴られている。六波羅蜜寺の地藏堂や愛宕念仏寺、鳥部山、北へ翔けていく雁、北歌は宗盛の暇を許す決定的な条件であると言える。しかし、この決定的な条件は小説「遠江」では次のように変わった。

花見の宴を盛り上げるために、熊野は歌の作りを勧めたが、宗盛は熊野に舞わせる。そして、熊野は宗盛の要求した通りに「鼓の音に合はして古い一曲をおもむろにお舞ひ」をはじめた。重病の母を心配するので、熊野は舞に専念できない。そのため、彼女の舞には悩みと悲しみの色彩がある。このような色彩は一層舞を美しくさせた。したがって、皆は「呼吸をひそめ、たなこころを握りしめて森として見られて」いた。もちろん、見惚れた人には宗盛も含まれている。彼の顔色は深い驚き以外に敬いの色を帯びている。熊野の舞に対して、宗盛は「ただ感嘆の外はないといふ深い感動の御様子」を示している。舞が終わると、宗盛はすぐ急いで熊野を自分のところに呼び出して舞の美しさを賛美したり、熊野の悩みの心を理解できたことを表したりして暇を許した。このように、謡曲での和歌の代わりに、宗盛は熊野の「一生懸命に舞つて舞つて舞のなかにしんとしたもの」に心を打たれたことで、熊野の重病の母を見舞う暇を許した。この舞は宗盛に暇を許させることにとって決定的な条件であると言える。

なぜ、和歌の代わりに舞は決定的な条件に設定されたのか。これは能の影響であると考えられる。まず、前述したように、犀星は能「熊野」を見た後、王朝小説「遠江」を書いた。次は舞の性質のためである。謡曲と能は分けられないが、区別できる。謡曲とは能の詞章のことである。それに対して、能は文字ではなく、演じるものである。舞はその演じるものの中の一つであり、能の特色である。また、

決定的な条件にしたのは物語において舞に重点を置いているからだ。この舞の重要性の強調から、観能に際して、犀星は舞に目を向けていたと考えられる。

更に、本文にも能と共通な表現が見られる。例えば、「鼓の音に合はして古い一曲をおもむろにお舞ひになりました」、「誰も皆呼吸をひそめ、たなごころを握りしめて森として見怱れてゐます」や「ただ感嘆の外はないといふ深い感動の御様子でございます」などがある。能では、鼓が使用される。また、「誰も皆呼吸をひそめ、たなごころを握りしめて森として見怱れてゐます」という描写から熊野の舞を見たのは宗盛だけではなく、他の人もいることが分かる。いわば多くの人々が熊野の舞を鑑賞している場面が描かれている。その場面は多くの客が観能している場面と似ている。なお、前述した小谷の叙述によると、犀星は能「熊野」を「感嘆の息を呑みながら」見ていた。この犀星の「感嘆」は宗盛の「感嘆の外はないといふ深い感動の御様子」に通じるところがある。

したがって、舞を宗盛に暇を許させる決定的な条件にしたのは犀星自身の観能体験の影響のためであると考えられる。その際、犀星は舞に注目していたとも見られる。

それでは、謡曲での和歌より、この舞が暇を許す決定的な条件になったことでどのような効果が生じているのか。まず、和歌は宗盛だけに見せられた。だが、舞は宗盛だけではなく、ほかの人も見られた。つまり、熊野は多くの人々に理解されている。宗盛に暇を許させる力は大きくなった。そうした大きい力の前に宗盛は暇を許さなければならぬ。そして、結果として宗盛もこの成り行きに従って、

暇を許した。そのため、物語を更に自然に進ませた。また、もう一つの効果は宗盛と熊野の親密な関係を表している。和歌は文字なので直接に熊野の悩みを伝えられる。しかし、舞は直接に熊野の悩みを伝えられない。伝えられるかどうかは舞を見る人の理解力による。舞から熊野の悩みを伺うことができたため、宗盛と熊野の心は通じ合っていると考えられる、このような心の通じ合いはこだけではなく、本文の所々に描かれている。

例えば、暇を許さなかった宗盛について、熊野は「御前にはもはやお許しがなくとも、わたくしの心が通じてゐてお縋りしてゐるやうなもの」であると語っている。また、熊野の暇に対して、宗盛は戯れながら許さないと言い出した。それでも、熊野は「それほど、おからかひになる御前様も熊野帰郷のことを始終お気になされてゐられ、それを仰せられずにもられぬ風に拝されます」と解釈している。つまり、熊野は宗盛と心が通じ合っていていつか暇が許されると信じている。そして、最後の結果は確かに熊野の思つた通りである。また、熊野は花見の宴に行く前に、「清水のお観音様でお経をおたのみし、帰郷の念願をお祈り申上げ」た。宴に現れていない熊野について、宗盛は「何処に参つてゐたか、そちのことなら観音におまゐりをして参つたのであらう」と言い当てている。このように、熊野と宗盛は互いに心が通じ合っている。夫婦の関係は非常に良好であり、信頼が見られる。

しかし、謡曲では、このような信頼、心の通じ合いが見られない。ここでは、熊野は暇を許さずに無理に花見に連れ出した宗盛を信じていない。まず、暇が許される前に、熊野は宗盛に理解されていない。母は宗盛の「御寵愛が深いために今までお許しがなかった」と考えている。宗盛は熊野に「母上と予とはいづれが大切か」と聞いて、「母上ばかり思ひひるて予のことを忘れてゐる」という理由で老母を嫉妬して暇を許さなかった。そうした嫉妬は深い愛のためではないか。宗盛は熊野との愛が親子の感情に負けることを恐れている。したがって、嫉妬の感情さえも出た。

以上のように、謡曲「熊野」と異なる部分から、王朝小説「遠江」における犀星の創作の方法と魅力を検討した。謡曲「熊野」に存在していない「雲州柑」と鶴を登場させることから、謡曲にないものを作る創作の方法が分かる。「雲州柑」と鶴の登場を通して、美しい老母を造型したり、宗盛に意識させたりする。そして、宗盛の暇を許すことにも力を貸した。謡曲「熊野」では、熊野に手紙を読ませたり、宗盛の気の変わりを恐れるので家に帰らずに直ちに帰郷するが、小説「遠江」では、宗盛が自分で手紙を読んだり、宗盛の心を信頼したりすることから、謡曲の内容に反するように書き直すという創作方法が伺える。これらにより、謡曲の複雑な人情を気高い人情の話に書き直させたと見える。創作において犀星の求めていた気高い人情、いい香り、温かさ<sup>25</sup>と美しさ<sup>26</sup>は小説「遠江」の物語で実現されていることが分かる。

このように、王朝小説と謡曲は関わりを持つが、その関わり方は主に謡曲と異なる方向から描くことである。作られたものからは、犀星が創作に際して注目していた要素が伺える。そして、犀星の拘っていた文学の価値が見られる。例えば、謡曲「熊野」では、手紙一通だけであるが、小説「遠江」では、物語が三通の手紙からなつて

この愛は暇が許されない理由から分かる。その理由について、老

いる。ここから、文学における手紙の重要性と役割が犀星に重視されていると分かる。また、謡曲「熊野」では、夫婦の間に信頼がないが、小説「遠江」では、夫婦の心が通じ合うと書かれている。こうした通じ合いは犀星が夫婦の関係において求めていたものであると言える。

### 3 謡曲の価値

以上のように、謡曲は犀星の王朝小説において重要な役割を果たしている。また、犀星は確かに能を見て作品を書いた。能と謡曲の犀星の王朝小説に対する影響を無視すべきではない。能、謡曲と王朝小説を比較して検討してこそ、犀星の謡曲の受容の姿勢と独創性を理解できる。そして、犀星の王朝小説を一層客観的に批評することができる。

ただし、今回は小説「遠江」だけを考察したので、その関係の全体を結論づけるにはまだ不十分である。前述した通り、謡曲に取材して書かれたと呼ばれる王朝小説には小説「遠江」以外にもある。

また、前述に引用した小谷の文<sup>28</sup>によれば、犀星が王朝の文学を勉強するために、主に提供されたのは『伊勢物語』と『大和物語』であり、謡曲はただついでに添えられたものである。また、謡曲には『伊勢物語』と『大和物語』に取材して書かれたものがある。犀星は謡曲を通して、『伊勢物語』『大和物語』を理解したと考えられる。更に、古典をもとにして書かれた謡曲から、犀星は古典を翻案する方法を学ぶことができたとも言える。したがって、典拠が謡曲ではないと

言われている王朝小説についても謡曲の影響は無視できない。特に、謡曲と同じように『伊勢物語』と『大和物語』に取材して作られた作品に注目すべきだろう。例えば、共に「筒井筒」と呼ばれている『伊勢物語』の章段をもとにして書かれたと指摘されている王朝小説『妙の君』（『虫寺抄』・博文館・一九四二年六月）と謡曲「井筒」の関係を探求する必要がある。

今後、引き続きこうした王朝小説と対応する謡曲の関係を考察し、犀星の古典の受容の姿勢と王朝小説の文学の価値を一層究明する。

(1) 本多浩「室生犀星ノート——「王朝もの」を中心に——」『徳島大学学芸紀要（人文科学）』一九六九年

(2) 宮内庁『昭和天皇実録 第八』（一九四〇年一月一〇日）東京書籍、二〇一六年九月

(3) 久保忠夫「室生犀星と古典」『国文学解釈と教材の研究』一九六一—一九六七年二月

(4) 室生犀星「追記」『かげろふの日記遺文』講談社、一九五九年一月

(5) 久保忠夫「室生犀星と古典」『国文学解釈と教材の研究』一九六一—一九六七年二月

(6) 磯貝英夫「犀星における古典親近の特質」『国文学解釈と鑑賞』一九六七年二月

(7) 志村有弘「室生犀星——王朝を求めた自由な作品群——」『国文学解釈と鑑賞』一九九二年五月

- (8) 上坂信男「C謡曲によるもの」『室生犀星と王朝文学』三弥井書店、一九八九年七月、上坂信男「室生犀星と謡曲（三篇）」『室生犀星研究』一九九三年二月、上坂信男「室生犀星と謡曲（二篇）」『室生犀星研究』一九九三年一〇月
- (9) 西田谷洋「はじめに」『室生犀星王朝小説の世界』一粒書房、二〇一二年二月
- (10) 乾英治郎「室生犀星（王朝物）の出發——芥川・堀・菊池との比較から」『室生犀星研究』二〇一六年一月
- (11) 室生犀星「気高いもの一つ」『謡曲界』謡曲界発行所、一九四〇年七月
- (12) 小谷恒「心残りの記」『室生犀星全王朝物語』月報上、作品社、一九八二年五月
- (13) 小谷恒「犀星の日々 二 王朝物」『逍空・犀星・辰雄』花曜社、一九八六年六月
- (14) 折口信夫・室生犀星「対談 古典について」『むらさき』一九四一年六月
- (15) 小谷恒「解説」『室生犀星作品集 第七卷』新潮社、一九五九年五月
- (16) 上坂信男「室生犀星と謡曲（三篇）」『室生犀星研究』一九九三年二月
- (17) 上坂信男「室生犀星と謡曲（三篇）」『室生犀星研究』一九九三年二月
- (18) 上坂信男「C謡曲によるもの」『室生犀星と王朝文学』三弥井書店、一九八九年七月、上坂信男「室生犀星と謡曲（三篇）」『室

生犀星研究』一九九三年二月、上坂信男「室生犀星と謡曲（二篇）」『室生犀星研究』一九九三年一〇月

(19) 上坂信男「室生犀星と謡曲（三篇）」『室生犀星研究』一九九三年二月

(20) 平山城児・志村有弘編「古典に取材した近代文学一覧」『国文学解釈と鑑賞』一九六七年二月

(21) 志村有弘「室生犀星——王朝を求めた自由な作品群——」『国文学解釈と鑑賞』一九九二年五月

(22) 小谷恒「解説」『室生犀星作品集 第七卷』新潮社、一九五九年五月

(23) 佐成謙太郎「熊野」『謡曲大観第五卷』明治書院、一九三二年四月。本稿で、謡曲についての参考と引用は本書による

(24) 小谷恒「解説」『室生犀星作品集 第七卷』新潮社、一九五九年五月

(25) 室生犀星「気高いもの一つ」『謡曲界』謡曲界発行所、一九四〇年七月

(26) 室生犀星は「序」（『萩の帖』全国書房、一九四三年三月）で平安物を花とその「匂ひ」に譬えて評価している。

(27) 室生犀星の王朝小説には温かい結末と「美しい」という言葉が頻繁に現れている。

(28) 小谷恒「犀星の日々 二 王朝物」『逍空・犀星・辰雄』花曜社、一九八六年六月